

G20大阪サミットに向けて

八木毅 駐ドイツ日本国大使

冒頭

4月30日に天皇陛下が御退位され、5月1日、皇太子殿下が御即位され、5月1日以降、新しい元号として「令和」が用いられています。「令和」は漢字2文字から構成される言葉で、「令」は「美しい」、「和」は「調和」をそれぞれ意味しています。その上で、「令和」には「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められています。5月1日に御即位された天皇陛下は、即位後朝見の儀において、「常に国民を思い、国民に寄り添いながら、憲法にのっとり、日本国および日本国民統合の象徴としての責務を果たすことを誓い、国民の幸せと国の一層の発展、そして世界の平和を切に希望します。」と述べられました。

大規模な国際的な会議としては、6月にG20サミットを大阪で開催し、8月にはアフリカ開発会議(TICAD)の第7回会合を横浜で開催します。

また、スポーツの国際行事としては、本年秋にラグビーワールドカップが日本で初めて開催され、2020年の東京オリンピック・パラリンピックと相俟って、これまで以上に人的交流が活発になることが期待されます。

さらに、日独関係の文脈では、2021年は、1861年に日本とドイツ(当時はプロイセン)との修好通商条約が締結され、両国間で外交関係が開設されて以来、160周年に当たります。2021年が「日独交流160周年」として、日独間の相互理解と交流を更に深める機会となることが期待されます。

G20大阪サミットの優先議題

G20大阪サミットの優先議題については、これまでのG20における議論を踏まえて検討しているところですが、大きくまとめれば、世界経済の成長と包摂的かつ持続可能な社会の実現です。前者については、自由貿易の推進、イノベーションを通じて世界経済の成長を牽引し、経済成長を目指すと同時に、格差への対処に取り組むべく議論を進めます。また、後者については、持続可能な開発目標(SDGs)を中心とした地球規模課題への貢献の方策を包摂的かつ持続可能な社会の実現を目標に掲げ、推進していきたいと考えています。

世界経済については、世界経済に不透明感が増し、多国間主義への信頼がほころびをみせるなか、G20は中核的使命である世界経済の運営に真摯に取り組む必要があると考えています。

特に、貿易を巡る緊張の高まりは世界経済に対する深刻なリスクであり、G20が対処すべき目下の最大課題のひとつです。保護主義や貿易制限的措置の応酬は、どの国の利益にもなりません。日本は、自由貿易の旗手として、ルールに基づく多角的貿易体制の強化・改善や、環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定(包括的・先進的TPP協定)、日EU経済連携協定(EPA)の発効に示されるとおり、経済連携協定を力強く推進してきました。今後も、東アジア地域包括的経済連携(RCEP、東南アジア諸国連合(ASEAN)、日本、



© 日本国大使館

中国、韓国、オーストラリア、ニュージーランド、インドが交渉参加。)の早期妥結や、各国・地域との自由経済協定や投資関連協定の締結を推進していきます。引き続き、G20議長国として、自由貿易を推進したいと思っています。

さらに、分野横断的事項として、イノベーションを重視しています。イノベーションは高齢化、エネルギー、環境といった社会問題の解決に資するものです。G20大阪サミットでは、イ

目次

巻頭寄稿文 G20大阪サミットに向けて 八木毅	1~2
インタビュー 労働市場政策および政治参画	3
会議報告 日独エネルギー変革評議会	4
人的交流事業 SCIENCEYOUTH Program	5
その他の事業報告	6
2019年事業案内	7
オープンハウス、6月15日	8

ノベーションが経済成長の達成と社会課題の解決のための鍵であることを示したいと思っています。

同時に、イノベーションが所期の潜在力を発揮するための環境整備も重要であり、安倍総理がダボス会議で発表されたデータ・ガバナンスや人工知能(AI)、Society 5.0についても議論を深めていきたいと考えています。特にAIについては、人間の職が代替されることを懸念する見方もありますが、AI人材の育成を加速化させることで新たな雇用を創出し、経済活性化も実現させることが重要です。

これに加え、デジタル・データはこれからの時代の経済成長のエンジンであり、データの効果的な活用のためには「信頼性のある自由なデータ流通(Data Free Flow with Trust)」を確保することが必要です。G20大阪サミットでは、データ・ガバナンス、電子商取引に焦点を当てて議論する「大阪トラック」の開始を提案し、世界貿易機関(WTO)改革に新風を吹き込みたいと思っています。

また、包括的かつ持続可能な世界の実現、SDGs達成の観点から、国際保健、気候変動、海洋プラスチックごみ等の地球規模課題についても、G20としてしっかりと議論することが必要です。

気候変動については、パリ協定に沿って、自国が決定する貢献(NDC)や温室効果ガス削減にかかる長期戦略の実施、気候資金や「適応」の論点に加え、イノベーションや非国家主体との気候変動対策に関する議論を通じ、具体的な対策を前進させるべく議長国として努力したいと考えています。

また、海洋プラスチックごみ問題は、途上国も含めた世界全体での取組が不可欠です。G20大阪サミットでは、世界全体でこの問題に実効的に取り組むための枠組みを構築したいと考えています。

さらに、世界経済の成長および途上国の持続可能な開発を実現するためには、物理的・人的・制度的連結性を強化し、ヒト・モノ・カネの流れを活性化させることが不可欠です。

そのため、G20大阪サミットに向け、開放性、透明性、ライフサイクルコストからみた経済性、債務の持続可能性等の要素を含む形で「質の高いインフラ」に関する国際スタンダードの具体化も目指したいと考えています。

女性の活躍推進という観点からは、女性の労働参加率の向上、特にSTEM分野(科学、技術、工学、数学)における女性教育支援、女性起業家支援の3点を重視しています。また、3月には、2014年より日本政府が主催している国際女性会議WAW!とW20(女性の経済的活躍を目的としてG20に提言を上げる民間主導グループ)が東京で合同開催されました。これまでのG20での議論で特定されたさまざまな課題の実施促進に向け、G20として力強いメッセージを発出したいと思っています。

なお、大阪でのサミット以外にも、福岡市での財務大臣・中央銀行総裁会議や名古屋市での外務大臣会合をはじめ、閣僚レベルの8会合が日本各地で開催されます。

結び

本年から2021年にかけてのこれら一連の機会を捉え、各国の日本への関心がこれまで以上に高まることを期待するとともに、世界のなかで日本が果たすべき役割を、しっかりと果たしていきたいと思っています。また、価値を共有するドイツとともに、ルールに基づく国際秩序の維持・発展に取り組んでまいります。

「jdzb echo」読者の皆様

5月1日に新天皇陛下が即位され、日本では「令和」の時代が幕を開けました。その数週間後の6月下旬に、日本はG20大阪サミットを開催します。本紙巻頭寄稿文では八木毅駐ドイツ日本国大使が、日本が議長国としてG20/パートナー諸国と協力して現代のグローバルな社会的課題——世界通商システムへの脅威から少子高齢化社会、人口知能(AI)の課題、地球温暖化、そして海洋プラスチックごみまで——の解決に向けて追及する目標を概説されます。また、G20大阪サミットの直前にベルリン日独センターは日独シンポジウム「G20に先行して——人工知能と革新」をベルリンで開催します。

ヴェルナー・パシヤ(Prof. Dr. Werner PASCHA)ベルリン日独センター副総裁とのインタビューでは、6月中旬にベルリン日独センターで開催される国際(日独仏)シンポジウム「労働市場政策および政治参画」の背景をご紹介します。そして、3月上旬に実施した日独エネルギー変革評議会の第6回評議会会議の成果を振り返ります。

最後に、今年は6月15日に開催する恒例の「オープンハウス」に皆様方を招待したいと思っています。ベルリン日独センターとその事業を紹介する以外にも、体験型日本文化や、日本のさまざまな食文化をお試しいただく機械をご用意いたしました。

皆様方のご来場を楽しみにしています。

クラウディア・シュミッツ(Claudia SCHMITZ)
ベルリン日独センター事務総長

jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙「jdzb echo」は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行 ベルリン日独センター(JDZB)
編集 ミヒャエル・ニーマン
(Michael NIEMANN)
E-Mail mniemann@jdzb.de

著者名が明記されている記事は著者の意見を反映するものであり、必ずしも編集部意見と一致するものではありません。

連絡先
Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzb@jdzb.de URL: <http://www.jdzb.de>

図書館の開館時間は火曜日と水曜日正午～午後6時、木曜日午前10時～午後6時です。蔵書借り出しも可能です。

ベルリン日独センターはドイツ日本研究所(在東京)およびフランス社会科学高等研究所(在パリ)と協力して、2019年6月19日に第3回国際(日独仏)シンポジウム「労働市場政策および政治参画」を開催します。本テーマに関し、本紙はデュースブルク・エッセン大学東アジア経済学部日本韓国講座のヴェルナー・パシャ先生(Prof. Dr. Werner PASCHA.)のお話を伺いました。

編集部:2017年にパリで、そして2018年に東京で開催した国際(日独仏)シンポジウムでは、所得の不平等、労働市場における不平等、そしてその影響を取り上げました。労働市場における不平等とは、具体的にどのようなものでしょうか。三ヶ国比較の最初の2回のシンポジウムでは、どのような知見を得られましたか。

パシャ:連続シンポジウムの開催は、刺激的な実験でした。というのも、国によってまったく異なる見解が出会う場となったからです。たとえば、日独間の二国間対話では、しばしば同じ主題を中心に議論が展開されます。しかし、第三国が関与することによって、幾分慣れ親しみ硬直した議論がときには打ち崩され、別の視点が加わり、理想的な場合は「目からうろこ」的な経験がみられます。その意においてすでに過去2回の実施経験から、「二国間レベルの事業を三国間レベルに拡大することで議論のために、そして結果として議論を通じて得られる知見のためにも少なからぬプラスの効果が得られるときもある」と断言することができます。

収入と富の格差は、三ヶ国すべてで実際大幅に増加しています。かつて日本は収入や富が平等主義的に配分される代表的な国として知られていましたが、そのような時代は終わりました。さまざまな指標によると、現在日本は三ヶ国のなかで最も不平等な社会です。労働市場における不平等の場合は状況異なりますが、いたるところで不安定雇用が著しく増加しており、たとえばフランスでは非常に短期間の有期雇用と独立請負業者の増加という形で表れています。そこで、2008年から2009年にかけての世界的な金融危機が、これらのプロセスの一種のターニングポイントを示しているのか問いましたが、結果として、おそらくそうではないであろうという結論に達しました。より大きく作用したのは技術の発展、グローバル化プロセス、そして1990年代以降に労働市場政策が規制緩和に転換したことだったと思われます。

編集部:労働市場政策と政治参画との相互作用について伺います。労働市場における不平等や歪みが政治参画を阻害したり、反主流派のルサンチマンや、さらには民主主義全般に対する不信感を招く可能性があると言えるでしょうか。

パシャ:もちろん、不平等が拡大することは政治に影響しますが、それは三ヶ国で驚くほど異なる形で表れています。かなり大規模な定量的調査に基づく研究では、「不平等が拡大したことで、社会における連帯意識が重視されるようになることはなかった。そのような傾向が若干なりともみられたのはドイツだが、それも比較的低い水準であつた。」という興味深い結果が発表されました。一般的には、社会的緊張が高まると右派抗議運動の求心力が強くなると考えられています。ドイツとフランスではその明確な兆候がみられますが、日本では与党自民党より右寄りのポピュリスト勢力が地盤を固めることはできませんでした。これを、良いことと評価することは可能です。しかし反面、選挙の投票率が史上最低水準に達し、多くの若者がもはや政治や民主主義に無関心であるとの調査もあります。

編集部:労働市場における不平等が拡大するなか、社会的な不平等を相殺可能な、あるいは少なくともその影響を軽減可能な労働市場政策とはどのようなものでしょうか。そしてそれは政治参画という意味で何を意味するのでしょうか。

パシャ:「何をすべきか。」これこそ、私たち一人ひとりを駆り立てたテーマです。パリと東京で開催した過去2回のシンポジウムで私たちが確信可能な回答を見出したと言うのは不遜です。このテーマは、国家行動の本質に係わるテーマと捉えることもできましょう。これに関しては、シンポジウム参加者間でかなり異なった見解がみられました。たとえば、かなり悲観的な立場をとる人もいました。その際、国家行動の裁量余地を、労働市場政策のより狭い分野で検討するのか、あるいは経済成長



© Universität Duisburg-Essen

と所得の発展、生産性向上プロセス、あるいは経済社会システム全体的な問題としてのより広い分野にこれらの問題を取り込んで検討するので、回答は異なります。この分野を広く捉えれば捉えるほど、目標指向的な方法で問題を解決することに対する懐疑心が大きくなります。

独自のデータ収集に基づく研究発表で、三ヶ国における「規制緩和」に向けたステップが決して一方通行ではないことが示されたことから興味深い議論が展開しました。たとえば、日本の規制緩和は生産システムを中心にみられ、これは依然として「自由化」と認識されていますが、社会保障システムにおける規制緩和になると「反自由化」とみられています。別の研究発表では、ドイツと日本においては自由化が蔓延する時代はすでに終了したのではないかと問題提起されました。選挙メカニズムや抗議を通じた政治参画には影響力がありますが——フランスの「黄色いベスト運動」についても活発に討議されました——、それは必然的な帰結ではなく、とりわけ方向性に関してはなんとも言えない訳です。

このような問題の最終的な回答を見出すことはおそらく不可能でしょう。したがって、最初の2回のシンポジウムより一層明白な教訓を引き出す機会としてベルリン日独センターで6月19日に以上の問題に関する議論をさらに深めることは賢明かつ有意義です。パリおよび東京開催のシンポジウムでのどちらかという学術的な議論が展開されましたが、第3回目のシンポジウムでは政界、経済界、社会の代表者もコメンテータや討論者として討議の輪に取り込みます。ベルリン日独センターはそのための理想的な場所であり、関係者全員が当日を心待ちにしています。

エネルギーヴェンデ(エネルギー転換)のデジタル化

ニールス・テンメン(Nils TEMMEN) エコスコンサルティング&リサーチ

2019年3月6日と7日の両日に、日独エネルギー変革評議会の第6回評議会会議がベルリン日独センターを会場に開催された。2019年に入って最初の評議会会議の主要トピックスは、デジタル化だった。日独エネルギー変革評議会の今後の活動においてデジタル化をより広範に取り上げるために、新たに作業部会「エネルギーヴェンデにおけるデジタル化」が設けられた。また、本会議の一環として、日独エネルギー変革評議会のメンバーはセクターカップリング(セクター間のエネルギー融通)部門における優れた事業例として、余剰エネルギーを冷暖房に利用している施設を視察した。

ヴッパータール気候環境エネルギー研究所(日独エネルギー変革評議会ドイツ側研究担当事務局)と日本エネルギー経済研究所(日独エネルギー変革評議会日本側事務局)は現在、新たに設立された作業部会「エネルギーヴェンデにおけるデジタル化」でバーチャルパワープラント(仮想発電所、VPP)とその基盤となるビジネスモデル構想を調査中である。その中心となるのが、ドイツの企業ネクスト・クラフトヴェルケや米国のエネルギー供給事業者パンフィック・ガス・アンド・エレクトリック・カンパニーなどのケーススタディである。さらに、デジタル化分野におけるドイツのシュタットヴェルケ(エネルギー供給・上下水・廃棄物処理・近距離交通等を担う地域公社)の活動も、作業部会にとって興味深いものである。また、ディストリクトヒーティング(遠隔地域熱供給システム)の熱貯蔵とセクターカップリングの観点から熱部門も調査中である。

デジタルソリューションは送配電系統事業者、電力生産者、電力販売者、消費者、そしてストレージプロバイダーが再生可能電力を無駄にすることなく効果的に共同使用することを可能にする。「制限するのではなく、利用しよう!」は、会議二日目に紹介された、ドイツ連邦経済技術省のプログラム「スマートエネルギーのショーウィンドウ——エ

ネルギーヴェンデのためのデジタルアジェンダ」(SINTEG)の助成金を得ているフラッグシッププロジェクト「WindNODE」のモットーである。本プロジェクトはシステムの安定性を維持しながら、できるだけ多くの再生可能エネルギーをシステムに統合することを目的に、ボトルネックを回避し、グリーン電力の最適使用を確保するために、セクターカップリングおよび地域発電所を通じた新しい柔軟なオプションを実証中である。

日独エネルギー変革評議会の会議終了後、日独両国の専門家はベルリンのヨーロッパ・エネルギーフォーラム(EUREF)キャンパスにある、パワーツーヒート(P2H)およびパワーツーコールド(P2C)を実施しているガーザック・ソリューションズのセクターカップリングプロジェクトを視察した。これは、余剰電力を電力ヒーターと二つの貯蔵タンクで暖房用に、または二つの圧縮冷凍機で冷房用にスマートに利用可能なシステムである。さらに、バイオメタンコジェネレーションプラントに接続することで低い供給電圧を補填し、システムを安定に保つことが可能である。

本プロジェクトを視察した日独エネルギー変革評議会の日本側メンバーは感銘を受けた模様である。東京大学の藤井康正教授は「再生可能エネルギーの統合において系統安定化は、とりわけ日本においても常に最も繊細な点のひとつです。P2H、P2C、コージェネレーションプラントをスマートに組み合わせることは、市街の将来的エネルギー供給にとって興味深い選択肢のひとつです。」と語った。

ボトルネック問題に焦点をあわせる

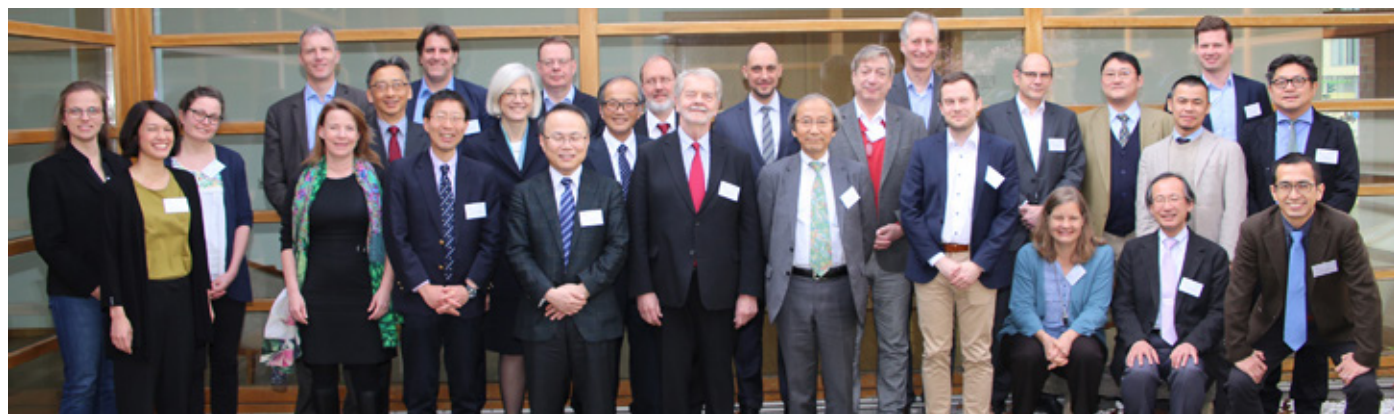
日独エネルギー変革評議会は、すでに2018年10月に第二フェーズの作業に着手し、日独エネルギー変革評議会のメンバーの他に産業界および市民社会を代表する外部専門家から成る作業部会を設立した。

これにより、日独エネルギー変革評議会の第一フェーズで特定したエネルギーヴェンデの五つの特定テーマ(「ボトルネックの問題」)に関して一層的を絞った研究が可能になる。たとえば、新しく設立された作業部会のひとつは、「ドイツと日本のエネルギーシステムにおける水素の将来的役割」をテーマとする比較調査をとまなうものである。本調査には現状分析、既存のシナリオのメタ分析、既存の標準と規制の概要が含まれる。

また、日独両国におけるエネルギー政策の今後の方向性について、2019年6月末に日本で開催されるG20大阪サミットに向けて集中的に議論する予定である。したがって、別の作業部会では、2050年までの長期エネルギー供給シナリオとそれに関連する検証メカニズムについて意見を交換した。そのたたき台として、ドイツ産業連盟による「Klimapfade in Deutschland」(ドイツの気候経路)と題する調査が参照された。本作業部会は、ドイツと日本が各々の気候保護目標としてコミットした目標を達成する際に、履行面で未だ残っているギャップをスケジュール内に埋める方法について議論している。

さらに、「建物のエネルギー効率」も日独エネルギー変革評議会の別の作業部会のテーマとして取り上げた。ベルリンでの日独エネルギー変革評議会会議ではドイツ連邦内務省、ドイツ産業界エネルギー効率性向上イニシアチブ(DENEFF)、ドイツ連邦建築・都市・空間研究所(BBSR)の外部専門家および日独エネルギー変革評議会メンバーが、第24回国連気候変動枠組条約締約国会議(COP24)の結果に関する文脈で建設政策について討議した。

日独エネルギー変革評議会の次回会議は2019年9月23日、24日に東京で開催される。日独エネルギー変革評議会の企画、活動内容、調査結果、インプットペーパー、日独エネルギー変革評議会の第一フェーズの最終報告書(英語、日本語とドイツ語の要約)のビデオは、日独エネルギー変革評議会のウェブサイト(www.gjetc.org)からダウンロード可能である。



日独高校生交流プログラム JDZB-SCIENCEYOUTH Program 2018

2018年秋、オルデンブルクのヘルバート・ギムナジウム(高等学校)の9人の在校生は、JDZB-SCIENCEYOUTH Programの助成を得て、2名の引率教師とともに日本を訪問しました。以下は同校12年生(日本の高校3年生に相当)のチャーク・ヴェルター(Tjark WELTER)による訪日報告です。

はじめに、僕達が日本へ旅行できるよう支援してくださった方々に感謝する。全参加者の思いを代弁するが、「僕たちはさまざまな経験をし、多くのことを学び、大勢の素晴らしい人々と出会い、そして楽しい思い出をいっぱいつくった。」自分自身のハイライトをひとつだけ選ぶように言われると、困ってしまう。なぜなら、この17日間の出来事すべてが並外れていて、エキサイティングで、かっこよくて、だからすべてのイベントが「僕のハイライト」と呼ぶに相応しかったからである。往復のフライトも、ホストファミリーと一緒に過ごした時間も、広島と大阪の二つの学校で体験したことも、遠足やハイキングに行ったことも、食べた物も、本当にすべてがハイライトだった。

この17日間は誰にとっても文化の側面で、言語の側面で、観光面で、そして食べ物に関してもおもしろい日々だったが、僕にとってはエモーショ

ナルな日々でもあった。というのも、僕は18年前に日本で生まれたからである。さらに、最初のホストファミリーが僕が生まれた地域に住んでいたため、生まれた場所とその周辺を再びみる機会を得られたこともあり、とりわけ感動的な日々となった。実は、数年前にも生誕の地をみるために日本を訪れたことがあったが、当時はもっと幼く、他のことに関心が向いていたので、まったく状況が異なっていた。さらに、当時は僕と生誕の地とのつながりをあまり認識していなかったこともある。両親が1年間住んでいて、僕が生まれた土地に戻るというこの経験は、とても新鮮だった。これまで、「故郷を後にした」といった感情をもったことはなかったのに、久しぶりに家に帰るような気分だった。今回の日本旅行を通じて、はじめて日本を第二の故郷として認識したのである。

それでも、今回の日本研修旅行のなかから僕自身のハイライトを選ぶ

としたら、ハイキングを挙げる。僕はもともと自然の多様性に惹かれる熱心なハイカーだ。だから、色々な場所で山歩きをできて、とても嬉しかった。宮島では他の人と一緒に弥山に登っただけでなく、下りも自発的に歩いた。ユネスコ世界遺産の熊野那智大社を見学するために紀伊山で山歩きし、伏見稲荷まで歩いたのもまたとない経験だった。日本の自然は全般的に素晴らしい。山頂に立ち、緑の木々に囲まれた状態で余り遠くないところに大海を臨むというのは——北ドイツに住む僕のように、展望できるのは海と山のどちらかひとつで、両方を一度に目にすることがない者には——言葉で言い尽くせない感動である。

最後に、この経験をさせていただいたことに改めて感謝する。僕たち一人ひとりが自分自身の経験を積み、多いに成長し、この旅行からどれだけ多くのことを得たのか、そしてそれが僕たちの人生にどれほどの影響を与えてくれたのか、誰一人としてまだ十分に理解していないと思う。本当にありがとうございました。

JDZB-SCIENCEYOUTH Programは、日独の高校間の交流を喚起し、持続可能な形で促進する目的で設立されたプログラムです。支援対象となるドイツの高等学校は理数系の高等学校、または理数系の授業に力を注ぐ高等学校、あるいは日本語の授業のある高等学校で、日本のスーパーサイエンスハイスクール(S S H)指定校をはじめとする高等学校と協力して自然科学または技術をテーマとする交流事業を意図し企画する高等学校です。

JDZB-SCIENCEYOUTH Program は、オリンパス株式会社の欧州地域統括会社である OLYMPUS Europa SE & Co KG(在ハンブルク)の財政支援を得て実施しております。





国際シンポジウム「エレクトロモビリティと都市システム——グローバルなコンテキストでみる東アジアのイノベーション」(2019年5月9日～10日、於ベルリン日独センター)

本シンポジウムは、デュースブルク・エッセン大学東アジアイノベーション先端科学研究所(IN-EAST)がドイツ連邦教育研究省の助成を得て実施した研究事業のクロージングイベントです。

異なる文化圏および政治体制においてイノベーションがどのように生まれ、社会に受け入れられるかという本研究では、東アジアのさまざまな社会をドイツ・ヨーロッパと比較しつつ取り上げました。



写真展「東京・ベルリン 二都物語、その姿」オープニングイベント(2019年4月8日、於ベルリン日独センター)

アーティストトークには東京とベルリンの出演写真家を代表し(写真左から)ギュンター・ツォルン(Günter ZORN)、ギエン＝ホワン・レ(Kiên Hoàng Lê)、小島康敬が参加し、ライカ・ギャラリーズ・インターナショナルオーストリアのアートディレクター兼代表のカーリン・カウフマン(Karin KAUFMANN)が司会しました。東京とベルリンの友好都市提携25周年を記念して実施する本写真展は、6月末までベルリン日独センターでご観覧いただけます。

廣瀬陽子講演会「アジアとヨーロッパ間の協力——日本の視点」(2019年2月28日、於ベルリン日独センター)

廣瀬陽子(慶應義塾大学総合政策学部教授・大学院政策・メディア研究科委員)は国際政治・比較政治学・コーカサス地域研究を専門とする日本の政治学者。講演後にベルント・ベルガー(Bernt BERGER、ドイツ外交政策研究所)とパネルディスカッションに臨み、会場からの質問にも応えました。



藤塚光政写真展「日本木造遺産——千年の建築を旅する」クロージングイベント

クリストフ・ヘンリヒセン(Dr. Christoph HENRICHSEN)講演会「日本の歴史的木造建築——ジャンル、技法、建材について」(2019年2月22日、於ベルリン日独センター)

ベルリン日独センターの歴代写真展のなかで記録的な訪問者数を得た本写真展は、クリストフ・ヘンリヒセン(指物師マイスター、美術史で博士号取得、日本の木造建築に関する権威)の講演会をもち終了しました。

会議系事業

国際社会における日独の共同責任

シンポジウム「グローバルヘルス III」

協力機関：国際・開発高等研究所グローバルヘルスセンター（ジュネーヴ）、国立国際医療研究センター（東京）
2019年10月25日

1.5トラック（官民対話）形式で実施する「日独安全保障ワークショップ」

協力機関：日本国外務省（東京）、独連邦外務省（ベルリン）
2019年12月開催予定、東京開催

少子高齢化社会

第四回日独シンポジウム「少子高齢化対策——日独の事例」

協力機関：独連邦家庭高齢者女性青少年省（ベルリン）、日本国厚生労働省（東京）
開催予定日：2019年秋、東京開催

デジタル化の進む社会

日独シンポジウム「G20に先行して——人工知能と革新」

協力機関：ケルン経済研究所、富士通総合研究所（東京）
2019年6月25日～26日

日独シンポジウム「リーガルテック——法および司法における人工知能——チャンスとリスク」

協力機関：独日法律家協会（ハンブルク）、フリードリヒ・エーベルト財団東京事務所、ドイツ連邦弁護士会（ベルリン）、ドイツ科学イノベーションフォーラム東京
2019年10月4日、東京開催

国家、企業、ガバナンス

国際（日独仏）シンポジウム「労働市場政策および政治参画」

協力機関：ドイツ日本研究所（東京）、フランス社会科学高等研究所（パリ）
2019年6月19日

ワークショップ「紫外線発光器・照射器の最先端と将来への期待」

協力機関：科学技術振興機構（東京）、ベルリン工科大学、名城大学（名古屋）
2019年8月29日～30日

リチャード・サミュエルズ（Prof. Richard SAMUELS）講演会「特殊任務——日本の情報・諜報機関の歴史」

2019年10月9日

日独シンポジウム「東京とベルリン——ユニバーサルデザインのまちづくり」

協力機関：国際交流基金（東京）
開催予定日：2019年秋

シンポジウム「教育水準の向上——社会的格差は狭まるのか固定化するのか」

協力機関：ベルリン自由大学、同志社大学（京都）
開催日未定

文化と変遷

建築対談シリーズ「ラディカルにモダニズム的」

協力機関：ドイツ建築家連盟（ベルリン）、ベルリン工科大学
開催予定日：2019年後半

特別事業

日独フォーラム第28回全体会議

協力機関：日本国際交流センター（東京）
2019年12月5日～6日、東京開催

文化事業

展覧会

写真展「東京・ベルリン 二都物語、その姿」
展示期間：2019年4月9日～6月28日

ロール・カテュジェ（写真）& 金原明音（ドローイング）二人展「Spagat」

オープニング：9月20日、19時
展示期間：2019年9月23日～11月15日

東山魁夷展「朝雲」（ベルリン日独センター所蔵のリトグラフなど）

オープニング：11月28日、19時
展示期間：2019年11月29日～2020年2月

音楽会

ジャズコンサート「遊びをせんとや」
2019年6月15日、19時
（オープンハウス → 8頁参照）

特別公演

梅若研会による能公演（ベルリン音楽祭の一環として）

2019年9月3日
会場：ベルリンフィルハーモニー
主催機関：ベルリン音楽祭、ケルン日本文化会館（国際交流基金）

映画上映会

無声映画「特急三百哩」（三枝源次郎監督、1928年）
ギュンター・ブーフワルト他による生演奏
2019年11月14日、19時開会

その他

ベルリン日独センター2019年オープンハウス
2019年6月15日（土）、14時から
（→ 8頁参照）

人的交流事業

- ・日独若手専門家交流
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・日独青少年指導者セミナー
- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム
- ・JDZB SCIENCE YOUTH PROGRAM

各プログラムの詳細は www.jdzb.de
→ 人的交流事業

展覧会観覧時間

月曜日～木曜日10時～17時
金曜日10時～15時30分

音楽会の申込み受付開始日は追ってお知らせします。

会場について別途記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。
詳しくは www.jdzb.de → 個別事業



プログラム（5月現在、最新版はwww.jdzb.de、入場無料）

14時：開会の挨拶およびプログラム紹介

14時～21時：屋台（寿司、おにぎらず、コロッケ、飲み物、他）

14時～19時

- ・ ベルリン日独センター 展、活動案内
- ・ 書籍市（日本語書籍、日本関連ドイツ語書籍）
- ・ 剣玉
- ・ 囲碁

14時15分 講演「和食——食と日常生活」

ワークショップ

「折紙」14時15分～18時

「風呂敷」14時15分＋15時30分＋16時45分＋18時

「マンガを描こう」14:15時＋15時25分＋16時35分＋17時45分

「書道」14時30分＋15時30分＋16時45分＋17時45分

日本語体験講座：14時30分＋15時15分＋16時＋16時45分＋17時30分＋18時15分

大伸座禅（15時15分）と新エクササイズKaQiLaカキラ（16時15分）

生け花のデモンストレーションと作品展示：15時30分＋17時

日独青少年交流プログラム紹介

子どものための日本語とドイツ語での読み聞かせ



コンサート「遊びをせんとや」は、日本の伝統音楽とジャズを組み合わせた金子純恵（三味線創作ジャズシンガー、写真右）のオリジナル作曲の演奏会です。三味線や琴など日本の伝統楽器をジャズのピアノトリオに組み込み、日本の伝統的な民謡から流行歌、ロック、ジャズまでの幅広いジャンルをお楽しみください。



19時

「遊びをせんとや」
金子純恵
（三味線、ジャズ
ヴォーカル）

藤岡愛音
（ドラム）

ダヴィデ・インコ
ルヴァイア
（ピアノ）と

スチュアート・ケン
プ（ベース）
によるジャズコン
サート